日本学術会議　科学者委員会
学術誌問題検討分科会（第２回）議事要旨

１．日　　時：　平成２４年３月２１日（水）14：00～16：00

２．場　　所：　日本学術会議　６－Ａ（２）会議室

３．出 席 者：　小松委員、矢野委員、嶋田委員、須田委員、北村委員、松岡委員、吉田委員、北里委員、浅島委員（欠席：田口委員、辻村委員、長野委員、玉尾委員）永井参考人、林参考人
事務局：石原参事官 他

４．配付資料：
資料１　前回議事要旨（案）
資料２　学術誌問題検討分科会 ―提言に至る議論の紹介―
資料３　提言後の学術情報世界
資料４　日本の学術誌に対する定量・定性分析の予備調査
参考１　委員名簿
参考２　日本の学術情報発信機能を強化するための科学研究費助成事業（科学研究費補助金(研究成果公開促進費)）の活用等について
参考３　日本の学術情報発信機能を強化するための科学研究費助成事業の活用等について（概要）
参考４　平成 24 年度科学研究費助成事業―科研費―公募要領（抜粋）

５．議　　事：
（１）開会
事務局から開会が宣言され、委員長が決まるまでの間は、事務局が議事進行することが確認された。また、委員長等の選出に先立って、参考人から報告いただくことで分科会の了承を得た。

（２）参考人からの報告
第 21 期学術誌問題検討分科会の特任連携会員であった林和弘氏（日本化学会学術情報部課長）と永井裕子氏（日本動物学会事務局長）から前期の提言内容及び提言後の活動状況について報告があった。

（３）主な質疑・意見交換等
・前期の提言をどう具体化するかが今期の活動の中心になるのではないか。
→新しいプラットフォームを作ることに関して、前期も何度か集まって各団体で話し合いがもたれたが、今回はもっと具現化してまとめていくことが重要。
・急速なＯＡ化について、前期の検討は弱いのではないか。ここ数年で変わってしまうのであれば、提言が遅れを取らないよう、一歩先を行くようにしなくてはならない。
→各機構に壁があって話さえできなかったものが、ようやく話合いをしてお互い共通

の利害をもつようになってきたところ。今後ＯＡ化についても大きなテーマとして、日本はどうするかという点を考えなくてはいけない。

・そもそも、ＯＡ化と電子ジャーナル化はどう違うのか。
→電子ジャーナルはサーバーに情報を置いておけば誰でも取れる状態で、商業出版社側がその購読に制限を加えてお金を取ったりしている。それに対抗して購入側である図書館等が、制限なく誰でも閲覧できるようにしたことがＯＡ化のはしり。海外では、当初は寄付を受けつつも、最終的には掲載する著者からお金をもらうビジネスモデルになっている。日本の学協会は、ビジネスモデルの担保がないまま、やみくもにサーバーに置いて無料で公開しているため、広い意味ではＯＡ化だが、フリーアクセスになってしまっている。現在では、一部商業出版社も、お金を支払えば論文を掲載しますといったビジネスに取り組みつつある。

・ＯＡといったトレンドは分かるが、今後はＯＡ一色になるのか。
→学術情報流通としては、読者が購読料を支払うサブスクリプションモデルか、著者が掲載料を支払うＯＡかの選択がある。これまで日本はサブスクリプションモデルに依拠してきたが、今後はＯＡを前提とするのか、並立するのか、それは研究者の行動次第である。日本にメガジャーナルを作るのもひとつの手である。研究者はブランドを大事にするため、ブランド力を持てるかという問題点もある。

・世界標準のプラットフォームも重要だが、学協会ごとに色々なレベルがあって、学問が持っている多様性をどうやって守るかも考える必要がある。多様性を考えるとクオリティの問題もあるが、それぞれの分野ごとに支援の仕方は違ってくるのでは。

・日本は世界に通用する販売網を持っていないのが現状。今後日本がどのようなモデルを作っていくのか、中国などは国策で動いているが、日本ではこのような会議の場で審議しているため、世界に置いて行かれないためにも、研究者自身がどうしていくべきか検討する必要がある。

・購読費モデルかＯＡか、どちらも事業モデルの違いにすぎない。本来はコミュニティの情報をどう磨いて誰に向けてどう発信すると一番効率的に届き、場合によって見返りがあるのか、といったことを考えるべき。そのためにも研究者の意識改革が重要である。

（４）役員の選出

委員間の互選により、前期からの議論の継続性及び提言の具現化のために浅島委員が推薦され、委員長に就任した。

浅島委員長から、研究者だけでは分からないことも多いため、本日参考人として参加いただいた永井氏、林氏をはじめ学術誌に関して世界で活躍している方々にも特任連携会員として審議に加わっていただきたいとの提案があり、分科会にて了承された。また、副委員長、幹事については改めて分科会メンバーが決まってから選出することが提案され、次回に持ち越しとなった。

６．そ の 他：

次回日程については、新たな委員が就任した後に改めて日程調整することとなった。